

- 一、次の傍線部の「が」「の」の用法として適当なものを、次のア～オから選べ。  
 <ア>主格 イ・連体修飾格 ウ・同格 エ・体言の代用(準体法) オ・比喩(連用修飾格)  
 1 大きな柑(かう)子(じ)の木の、枝もたわわになりたるが、(徒然草)
- 二、次の傍線部の「を」の用法として適当なものを、次のア～ウから選べ。  
 <ア>動作の対象 イ・動作の起点 ウ・経過する場所・時  
 1 境(さかひ)を出でて、下(しも)総(うさ)のいかたといふ所に泊まりぬ。(更級日記)
- 三、次の傍線部の「と」の用法として適当なものを、次のア～カから選べ。  
 <ア>動作を共にする相手 イ・変化の結果 ウ・比較の基準 エ・比喩 オ・引用 カ・並列  
 1 思ふこと言はでぞただに止(や)みぬべき我と等しき人し無ければ(伊勢物語)
- 四、次の傍線部の「より」「へ」「から」の用法として適当なものを、次のア～カから選べ。  
 <ア>動作の起点(場所・時) イ・経過する場所 ウ・比較の基準 エ・手段・方法 オ・即時 カ・方向  
 1 伝へて聞きたるは、さし向かひていふよりもうれし。(枕草子)
- 五、傍点部の助詞「が」「の」「に」「より」に注意して、傍線部を口語訳せよ。  
 1 よろづのことは、月見るに(●)(●)こそ慰むものなれ。(徒然草)
- 六、次の傍線部の助詞の用法として適当なものを、次のア～キから選べ。  
 <ア>動作の対象 イ・手段・方法 ウ・体言の代用(準体法) エ・原因・理由 オ・使役の相手 カ・主格 キ・即時  
 1 げにいと小さくあばれたる家なり。見るより悲しくて、うち叩けば、(堤中納言物語)
- 七、次の傍線部の「ば」の用法として適当なものを、次のア～エから選べ。  
 <ア>順接の仮定条件 イ・順接の確定条件(原因・理由) ウ・順接の確定条件(偶然条件) エ・順接の確定条件(恒時条件)  
 1 石山にこもりたれば、夜もすがら雨ぞいみじく降る。(更級日記)
- 八、次の傍線部の「と」「とも」「ど」「ども」の用法として適当なものを、次のア～ウから選べ。  
 <ア>逆接の仮定条件 イ・逆接の確定条件 ウ・逆接の恒時条件  
 1 散りぬとも香(か)をだに残せ梅の花恋しき時の思ひいでにせむ(古今集)
- 九、次の傍線部の「が」「に」「を」「て」「して」「で」の用法として適当なものを次のア～エから選べ。  
 <ア>逆接の確定条件 イ・順接の確定条件 ウ・単純な接続 エ・打消接続  
 1 二つなぎものと思ひしを水(みな)底(そこ)に山の端(は)ならで出(い)づる月影(古今集)
- 十、傍点部の接続助詞に注意して、傍線部を口語訳せよ。  
 1 心には忘れずな(●)が(●)ら(●)、消息などもせで久しく侍りしに、(源氏物語)
- 十一、次の傍線部「だに」「すら」「さへ」の用法として適当なものを、次のア～ウから選べ。  
 <ア>類推 イ・最小限の希望(限定) ウ・添加  
 1 花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人の知るべく(古今集)
- 十二、次の傍線部の副助詞の用法として適当なものを、次のア～エから選べ。  
 <ア>限定 イ・強意 ウ・程度 エ・限度・範囲  
 1 月・花はさらなり。風のみこそ、人に心はつくめれ。(徒然草)
- 十三、次の傍線部の副助詞の用法として適当なものを、次のア～エから選べ。  
 <ア>例示 イ・婉曲 ウ・引用 エ・強意  
 1 わがために来る秋にしもあらなくに虫の音(ね)聞けばまづぞ悲しき(古今集)
- 十四、傍点部の副助詞に注意して、傍線部を口語訳せよ。  
 1 水をだ(●)に(●)咽(のど)へ入れ給はず。(平家物語)
- 十五、次の傍線部の係助詞「は」「も」の用法として適当なものを、次のア～エから選べ。  
 <ア>とりたて・区別 イ・同趣の一つ ウ・並列・列挙 エ・強意  
 1 山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば(古今集)
- 十六、傍線部の係助詞に注意し、( )内の語を適当な形に活用させよ。  
 1 春がすみたつを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへ(り)(古今集)
- 十七、次の傍線部の終助詞の用法として適当なものを、次のア～ウから選べ。  
 <ア>禁止 イ・詠嘆 ウ・強意(念押し)  
 1 あはれなる人を見つるかな。(源氏物語)
- 十八、次の傍線部の終助詞の用法として適当なものを、次のア～イから選べ。  
 <ア>自己の希望 イ・他への願望  
 1 あはれ紅葉を焼(た)かむ人もがな。(徒然草)
- 十九、次の傍線部の用法として適当なものを、次のア～エから選べ。  
 <ア>強意の係助詞「なむ」 イ・願望の終助詞「なむ」 ウ・強意の助動詞「ぬ」の未然形+推量(意志)の助動詞「む」 エ・ナ変動詞の未然形活用語尾+推量(意志)の助動詞「む」  
 1 人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとにもうちも寝ななむ(伊勢物語)
- 二十、次の傍線部の間投助詞の用法として適当なものを、次のア～ウから選べ。  
 <ア>詠嘆 イ・呼びかけ ウ・強意  
 1 とく装(さう)束(ぞ)きて、かしこへを参れ。(蜻蛉日記)

【正解】

1一ウ

1二イ

1三ウ

1四ウ

1五月を見ることによつて

1六キ

1七ウ

1八ア

1九ア

1十心では忘れないけれども

1十一イ

1十二イ

1十三エ

1十四水をさえ

1十五ウ

1十六る

1十七イ

1十八イ

1十九イ

1二十ウ